
愚神

鳶之はつき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愚神

【Nコード】

N3467F

【作者名】

鳳之はつき

【あらすじ】

カズマは姪のスズカを引き取ってから6年が過ぎた。ある日二人はなぞの女性と出会い、それを期に二人の生活に不穏な影が漂い始める。カズマは6年前の父親と姉の死が関わっていると考え、二人の死の真相を探っていく。

それは父と姉が死んでから6年目の命日に始まった。

6年前、父と姉は死んだ。原因は交通事故で、姉が運転する車が雨に濡れた道路でハンドルをとられスリップし横転、炎上したらしい。

当時16歳だった僕は二人の確認をした。

もつとも、火葬前に黒焦げになった二人は生前の面影なんてみとれるわけもなく、焼け残った細かな遺品から父と姉であるとどこか受け入れられない思いのまま確認をした。

母は自分を生んですぐに亡くなったと聞いている。

つまり、父と姉が僕に残された家族だったのだ。

こうして僕は一人きりとなったわけだが、二人の最後があいつた形であっただけに悲しいとかいった感情は不思議なほどに起こらなかった。

幸い父がなんだかえらい研究をしていて、その道ではかなりの実績があったようで、生前の蓄えや保険なんかで大学を出るぐらいまでなら十分に生活できそうだったので、ひとまず僕に関しては親族にもめ事を起こさずに済んだ。

一方で起きたのが、姉が残した子供についてだった。

姉に子供が居たことを弟である自分もこの時初めて知ったぐらいだから、当然父親が誰かなんて分かるはずも無かった。

その子供、当時4歳だったスズ力を親戚一同敬遠し誰も引き取って面倒見ようとは言わず、変な緊張感が漂っていた。放っておけば彼女は施設に送られる事となったのだろつ。

「その子を、僕に引き取らせていただけませんか……？」

いくら金があっても今後に全くの不安が無いわけではないのに、
思わず言葉が出ていた。

「カズマ君はまだ16歳でしょ。」

「学校だってあるのだから無理に決まってるじゃない。」などと大人たちは考えを改めると口々に言った。

「その子は僕の姪ですから。」

そうして僕は危うくは血縁すら無いかもしれない彼女を引き取る事となった。

|| || || || ||

あれから6年、僕は姪を連れて二人の墓を訪れた。

毎月の月命日にも訪れるが、この日は特別正装して行くのが6年間何となく守られてきた決まりだ。

墓は公園のような日当たりのいい霊園にある。

母が亡くなったとき、生前明るく輝かしかった彼女が鬱蒼としたくらい場所に一人きりでは可哀想だと言って父がこの場所を選んだ。霊園は奥に行くほど一軒ごとに与えられる敷地が広くなっていく。うちの墓はわりと奥の方にあつて、敷地内にいくつか花が植えられている。これも父が母を思つての事だった。

灰がかつた白い石畳の道を三人の眠る場所に向かって歩いていくと、うちの墓の前に女性がしゃがみこんでいるのが見えた。

「カズ君あの人だれかなあ？」
スズカもまた気が付いたようで、少し不安げに聞こえる声でそう言つて手を握つてきた。

僕達はその女性が終えるまでその場で待っていた。
しばらくして、女性はゆっくり立ち上がるとこちらに向かって歩きだした。

その姿を見て僕は最近見た映画を思い出した。
近代ヨーロッパが舞台のその映画の中で、恋人を亡くした女性が着ていたような黒いドレスをこの女性も着ていたからだ。

僕は、女性に馴染んではいるものの、どこか場違いな空気も感じ

るその姿にしばらくみとれた。

頭から黒いベールをかぶっていたため、はつきりと顔を見ることはできなかったが、やはり見覚えの無い女性だ。

互いにすれ違いざまに目礼をかわす。その時女性は確かに僕にささやいた。

「……はじめましてカズマ。」

驚いて振り返ったが、女性はそのまま優雅がな足取りで歩いていてしまった。

「カズ君早く行こうよ!」

痺れを切らしたスズカの声で僕は我に返った。

スズカは怒っているとも泣き出しそうともいえる顔で僕の上着の袖をつかみながら、その場で体をゆすったり足踏みしている。

「ああ、そうだね。」

「はやくママたちに挨拶しないとママ待ってるよ!」

スズカは僕の手を乱暴に引っ張って進んでいく。なんだか可笑しくて、先程まで僕の頭を支配していた彼女はどこかへ消え去っていた。

墓の前には女性が置いていったのだろう。色鮮やかな花束が左を頭にして置かれていた。

スズカはその花束を見て綺麗だとはしゃぎ、最後に自分達が買ってきたものも負けないのだと誰に向けてなのか言った。そんな姿にも僕は微笑ましく思ってしまうのだった。

「カズ君お花ちょうだい。それからお水もあげてね。」

僕は言われるままに花を渡し、墓石に水をかけた。

最後に線香を供えて、墓参りは終わる。

墓の前で二人並んで手を合わせた。それが終わるとスズカはうきうきした様子でまた僕の手を引っ張る。

「カズ君、お腹空いた。」

時刻はもう正午過ぎだった。

墓参りに来た後は、いつもスズカのお気に入り入りの店で食事する事も、なんとなくまもられてきた決まりなのだ。

霊園を出てから車を走らせてしばらくしたところにあるオープンテラスのイタリア料理の店が最近のスズカのお気に入りだ。落ち着いた雰囲気その店が気に入るなんて、この小学生は案外ませているのかもしれない。

その後もスズカの指示する場所を点々として、夕食まで外ですませてしまった。

翌日、休日は朝の仕事はスズカに任せて僕は朝と昼の間くらいまで眠るか自室で休んでいる。スズカも気を利かせて、普段なら僕を起こすようなことはしないのだが……。

「カズ君　　!!」

僕を呼ぶスズカの声が階段下から忙しく何度も聞こえてくる。

仕方なく下へ降りると、階段下に来ていたスズカはあと数段残た僕の手をつかんで引っ張っていった。

「どうしたんだよ。危ないだろ。」

危つく踏み外す所だったので思わず口に出したが、スズカには聞こえないようで、リビングのドアを開けると、テレビの前まで僕を引っ張ると必死になって画面を指した。

「見て！この人昨日お墓に来てた人だよね？」

美しく整った顔立ちに、目蓋が重そうな目をしたその女性は、先日来日したオペラ歌手のエレン・ハーベルだった。

華奢な体からは想像もつかないような声量と、幅広い音域を操る彼女の歌声は世界中で高い評価を受けている。

そんな人物が自分達の家族と関係あるわけがないだろうと、スズカの言葉を否定するが、スズカは絶対にそうだと言って意見を曲げる気配が無い。

「墓に来ていた女性は頭からベールを被っていたじゃないか、それでもスズカはその人の顔を覚えてるのか？」

少しめんどくさく思う気持ち치가表れてしまったのか、どこか不機嫌そうに僕は言った。

するとスズカは頬を膨らませ負けじと言い返す。

「違うよ！私だって顔は見えなかった。けどエレンがしてる指輪と昨日の女の人が着けてたのと同じ何だもん！」

そして、見ているとい wanna ばかりに僕の腕をつかんだままテレビ画面とにらみあった。

僕も仕方なしにその場につつまたまま画面に目を向ける。

すると、画面のエレン・ハーベルが前髪を指先で撫でるように触った。確かにその指にはたくさんの指輪がはめられていて、特に中指にはめられた二匹の蛇が指に巻き付いているいるデザイン指輪が目を引いた。

おそらくスズカもこの指輪をさしているのだろう。

やっぱり指輪をしていると得意気だが僕は女性が着けていたところを見ていないから何とも言えない。

しかし僕はすぐにスズカと意見を同じにした。

取り囲む報道陣から投げ掛けられる質問に全て首をふったり、頷いたりして答えていたエレンだったが、ある質問に対して声を上げて答えたのだ。

虚ろな響きだがはつきりとしたその声は、確かに僕にあの日の女性を思い出させ、彼女が囁いた言葉が再び耳に響いた。

一瞬にして混乱の渦にのまれていく自分。それに気付いたのかスズカは僕の名前を呼ぶ。

ひとまず僕はすべてに蓋をしてスズカにむかって言った。

「そうかもしれないけど、やっぱり違いんじゃないかな？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3467f/>

愚神

2010年10月9日23時11分発行